

内田義彦におけるテクストの問題 — 方法としてのフィクションとレトリック —

Essay of Yoshihiko Uchida and its Method of Fiction and Rhetoric

竹 本 洋

Yoshihiko Uchida(1913-89), historian of economics, published many essays on the modernization in Japan. His essays were composed as fiction and made the most of rhetoric. We must discriminate between the fictional narration and historical facts in his essays and find the reality from the fiction.

Hiroshi Takemoto

JEL : B31

Key words : modernization, looker-on, participation

I はじめに

耳順に手が届くころ、チェーホフにこと寄せながら、大言壮語を慎み学問への専心をあらためて語った学究がいた。

大仰と日常性が抽象的に対立させられながらそれぞれに氾濫している今日、私がチェーホフに学びたいのは、まさにこの小さな世界の重さと大きさを捉える感覚なのである。それこそがチェーホフの魅力というべきものなのであろうが、その魅力を味わうためには、私自身、大仰なことを言わず、小さな学問の世界で働く意味を求めて働きつづけなければなるまい。むろん後世から見れば「一寸」した短編の材料にもならぬ結果になり終わるであろうことは覚悟のまえである。¹⁾

1) 内田義彦「チェーホフの魅力」『民芸の仲間』118号（「かもめ」公演パンフレット）、1969年8

この美しい文を記してからちょうど 20 年後の 1989 年、その年に起こった天安門事件やベルリンの壁の崩壊を見ることなく、また年末のアメリカとソ連の両首脳による「東西冷戦の終結」と「新時代の到来」との歴史的告知を聞くこともなく、その人は逝った。経済学史研究家の内田義彦（1913-89）である。かれが遺したものが「短編の材料」にもならぬものであったかどうかは、なお評価を待たなければならないが、その大半は『内田義彦著作集』全 10 巻（岩波書店、1988-89）とその補巻と副題に銘打たれた『時代と学問』（岩波書店、2002）とに収録された。後者には書簡や生前には公表されなかった講演の速記録も含まれている。この著作集を辿ることで、内田の研究と思想の幅と奥行きとを探ることができるだけでなく、その生活の一端をも知ることができる。読み進めるとあることに気がつく。それは同じ様な話題やテーマが繰り返して語られていることである。そのことは内田自身も自覚していたようで、「私は自分の書いたものを……まとめながら精読してみて……同じことを、手をかえ品をかえ、いろんな角度から追求してたんだなあという、感じがする。」と述べている。²⁾ その「同じこと」つまり生涯をかけたテーマについて、ある講演で次のように述べている。

私は子供の頃から芝居が好きでしたが、芝居の世界は人間のとらえ方が実に具体的でしょう。個々の人間の具体的な把握を通じて、言わんとする全体像が展開されてくる。ところが、社会科学の場合はえてしてそうではない。構成員たる人間の把握の基礎を欠いた世界像になりやすい。私は、芝居の世界ではなく、社会科学の世界で、学問的に、人間的基礎にさかのぼりながら、人間で成り立つ世界……を社会科学のどう理解するか、それにはどうしたらよいか、ということ、何年間もずっと考えてきたつもり

月、20 ページ。『学問への散策』岩波書店、1974 年、142 ページ、『内田義彦著作集』第 6 巻、岩波書店、1988 年、116-117 ページ。なお『学問への散策』に収録のさいに一部の表現の改訂と加筆がほどこされた。引用は以下でも原則的に初出による。著作集については簡略に『著作集』とのみ記し、出版社も省略する。

2) 内田義彦『日本資本主義の思想像』岩波書店、1967 年、「あとがき」361 ページ。『著作集』第 5 巻、1988 年、299 ページ。

です。それが、良かれ悪しかれ、私の学風になっていると思います。(傍点内田)³⁾

社会現象をもっぱら実証的に分析することで自足せず、社会の構成員である人々の「人間的基礎」に遡って、あるいはそこから出発して社会の全体像を捉えるような社会科学を創造するというこの問題意識が、どのような形となって結実をみたのか、あるいは志なかばで終わったのか、それを検討してみることは内田論のポイントのひとつである。本稿がとりあげるのはそうした本格的課題の前段階にある問題、すなわち内田の書き物に付随するテキストとしての問題性とそこから派生する読解上の問題である。これは広い意味でのテキスト・クリティークにかかわることであるが、それによって内田の方法と呼べるものに触れることができるだろう。ここで方法というのは、直接的には語りや叙述の方法のことであるが、そこから内田の社会認識や社会科学を構想し構成する方法をも透視できるように思われる。

さきに内田は同種のテーマや事柄を再三語っているとあったが、そこには内田自身のこと——たとえば自伝的な回顧やその時々公にした著作やエッセイ、さらには時務的な発言——がふくまれている。しかし同じような事柄やテーマを取りあげても、その論ずる角度や重点のおき方がそのつど異なるせいか、論述の内容に微妙な差がある。とりわけ自己を語るばあいには、のちに見るように、その語り口にかなりの違いがみられる。内田のテキストを読むにあたっては、かれ自身のいう「ずっと考えてきた」こと、いわば“不変のもの”に注目するだけでなく、“変化しているもの”にも同等の注意を払い、その両

3) 内田義彦「読書について」『桜門春秋』26号、冬季号、日本大学広報部、1985年12月、71ページ。『生きること、学ぶこと〔新版〕』藤原書店、2004年、50-51ページ（『著作集』未収）。内田は次のようにも言っている。「人間にとって資本主義は何を意味するか。そして、この、『人間にとって資本主義は何を意味するか』を考えてゆく上に、経済学という学問は、いったい、いかにして、いかなる意味を持ちうるのであろうか。このことを私は長らく考えつづけてきたが、……こういう私の問題は、『経済学（あるいは社会科学）における人間の問題』とか、『初期マルクスと『資本論』の関連』とかいうことと、関わりを持っている。」（『資本論の世界』岩波新書、1966年、212ページ。『著作集』第4巻、1988年、403ページ。）

者の結び目を解きほぐさなければならない。

内田を読み進めるともう一つ問題に遭遇する。それは内田がたびたび同じテキストを修正していることである。それが推敲上の加筆、削除、訂正であれば、『著作集』に収録されたテキストを決定版として扱うことができるのだが、そこには推敲の域を越えたものがあり、そのため『著作集』に全面的に依拠すると、読みの欠落と偏りが生じることになる。『著作集』に収録されているテキストとその修正前のテキストとの差異にこそ、内田を読むうえでの重要な鍵があるかも知れないからである。以下では、内田の自己言及（自己語り）のテキストが反復修正されている例を主にとりあげて、テキスト上の留意すべき問題点を光をあてたい。

II 同一テキストの反復修正 — 「社会科学の視座」の結語のばあい—

内田に不思議な書名の本がある。『学問への散策』（岩波書店、1974。『著作集』第 6 巻に所収）と『作品としての社会科学』（岩波書店、1981。『著作集』第 8 巻に所収）とである。「作品としての社会科学」の意味については本稿の末尾で簡単に言及するつもりなので、ここでは「学問への散策」の含意についてみておこう。『学問への散策』に先だって上梓された『日本資本主義の思想像』（1967）の「あとがき」で、そのことにすでに言及がなされている。それによると、内田のその時々⁴⁾の現実問題に対する問題意識を、かれの専門である経済学史研究のテーマに結実させるために、それを媒介するいくつかの「環」（小テーマ）を考究するという手続きを取る。この学問的成果への模索過程ないしは成熟過程を散策ないし散歩と呼んでいる。⁴⁾ 散策の収穫は専門書や専攻論文ではなく、エッセイの形で提示するというのが内田の選んだスタイルである。

4) 「学問への散策（散歩）」に関して以下のように述べられている。

「私の学問の発生基盤である 1930 年代について言えば、30 年代は、『生誕』の場合とちがって、日本資本主義に特殊な危機状況に於いてだけではなく、世界資本主義の構造転換の開始の時期として、また、人民戦線の形成と失敗の時期として捉えなおす必要があった。そして、そのためには、学史の領域でも、もう少し、スミスとマルクスの間をつなぐものについての理解を深めておかなければならぬと考えた。その間での学史の領域における散歩のあとを示すものが、第 4 章に収録したいくつかのエッセイである。そして、そうした散歩によって媒介の環をいくつか増やしながらか、再び、学説史的に言えばマルクスに、日本についていえば現代の日本に、研究と

したがって内田のエッセイは研究書や研究論文と緊密に結びついている。

『作品としての社会科学』（以下で『作品』と略記するばあいがある）に「社会科学の視座」と題するエッセイが収録されている。その元になったのは、1968年10月1日に京都で開催された岩波文化講演会での講演である。同行の講演者は、大江健三郎と羽仁五郎とである。この講演の録音は内田が亡くなった年の秋に（1989年11月）、岩波書店から文芸カセットとして売り出され、私はそれでこの講演を聴くことができた。⁵⁾ この講演速記に加筆した同名のエッセイが、翌年1月の『思想』に掲載され、その末尾に「本稿は、1968年10月1日に京都市で行われた岩波文化講演会での講演速記に加筆したものである。（1968年11月3日）」と付記されている。日付から講演後1か月で加筆修正がおこなわれたことがわかる。ところがこの『思想』掲載の「社会科学の視座」は、12年後に『作品としての社会科学』に収録されるにあたって、再び加筆修正が施された（『著作集』所収の「社会科学の視座」は、『作品』に収められたものと同一である）。講演、『思想』掲載のもの、『作品』（『著作集』）所収のもの、この三者を比較してみると、多くの加筆、削除等が施されたことがわかるが、その全部を検討することは煩雑だし、本稿の趣旨からもその必要はない。以下では講演の最後の箇所だけをとりあげる。「社会科学の視座」の講演、『思想』掲載のもの、『作品』所収のものを順にテキスト1、2、3とする。そこに引いたアンダーラインの区別は次の通りである。

一線 テキスト2で付加された部分

二重線 テキスト3で付加された部分

波線 テキスト2で付加され、テキスト3では削除された部分

〔テキスト1〕 「社会科学の視座」 岩波文化講演会、1968年10月1日

関心の中心を移していった過程に書いたものが『日本思想史におけるウェーバー問題』であり、——『資本の世界』を間において——最後の『「資本論」と現代』である。（前掲『日本資本主義の思想像』「あとがき」365ページ、『著作集』第5巻、302-303ページ。）なお、『著作集』第6巻の「後記」483ページでも「散策」について言及がされている。

5) 岩波の文芸カセットは、「社会科学の視座」と、1967年6月15日に催された同じく岩波文化講演会での内田講演「資本論と現代」とを2巻セットとして発売された。

マルクスは生産手段の共同所有によって自由な個体というものが開花するという大きな予言をいたしましたけれども、その自由な個体というのは、私はどうしても一人一人が学問の創造者でもなきゃならないと思います。つまり社会科学の結論はこうなんであってという受け手であるということでは、とても自由な個体なんていうことはできないというふうに思います。**これは単に未来社会の問題ではない**。私は最近、そういう一人一人が賭けることによって学問をしていくというそういう**社会主義の強さ**というものをようやく確信し始めたように**この頃の情勢をみて感じる**わけでございませけれども、同時にこれは**われわれの問題**でありまして、それぞれ**私もそれぞれの分に応じて参加してゆくなかで勉強していきたい**と考えております。(ゴシックは竹本による。以下同様)

テキスト 1 を要約すると、第 1 に、社会主義社会で「自由な個体」が開花するというマルクスの予言に、その自由な個体は同時に「一人一人が賭けることによって学問をしていく」投企的な個体でもなければならぬという内田の解釈が付加される。第 2 に、内田は、上の自由な個体（投企的学問主体）の実践的形成という「社会主義の強さ」を「この頃の情勢」を見て確信するにいたった。第 3 に、この自由な個体の形成は未来社会の課題ではなく「われわれの問題」でもあって、内田個人も「分に応じて参加してゆくなかで勉強していきたい」と決意する。

『思想』掲載のエッセイで、この箇所は次のように改められた。

〔テキスト 2〕 「社会科学の視座」『思想』No. 535、1969 年 1 月

マルクスは生産手段の共有によって自由な個体というものが開花するといいました。社会的に結合する自由な個体の開花が自己目的で、生産手段の共同所有はそのための——但し絶対不可欠な——手段です。その自由な個体というのは、同時に学問創造の一環を受け持っている者でなければならぬと私は思います。社会科学の結論はこうなんであってという学問の受け手であるというようなことでは、いくらひまがあり「文化生活」を享受していても、とても自由な個体なんていうことはできない。学問への端緒

を一人一人が自分の中に持ち、自分の責任に於て高度な学問を身につける自由な個体が、いったい「生産手段の共有」ということの実が上がるためには、どういう装置が必要かという問題の設定と解決に参加してゆく。その循環をもっているのが社会主義だと思う。私は最近、そういうものとして社会主義の人間の強さというものをつくづく感じさせられたと同時に社会主義とは何かを根本的に考えねばならぬと感じているわけですが、同時にこれは単なる未来社会の問題でも他の国の問題でもない。われわれの問題でもありまして、私も日本の社会科学を作るという仕事に私なりに参加してゆくなかで勉強していきたいと考えております。（『思想』No. 535、19 ページ。）

テキスト 2 では、テキスト 1 の第 1 の論点について、自由な個体の開花が社会主義の目的であり、生産手段の共有はその絶対不可欠な手段であるという、目的・手段関係を明確にしたうえで、この主体と制度とが「循環」的に結びつくためには、一人一人が学問への主体的動機をはぐくみながら「高度な学問」を身につけて、生産手段の共有を実効あるものにする「装置」の開発に「参加」してゆくことが必要だという主張が加わる。言われていることは未だ理想的で具体性に欠けるが、内田独自の社会主義像の一端をなすものであろう。⁶⁾ テキスト 1 の第 3 の論点で、内田自身も「参加してゆくなかで勉強していきたい」と述べていたが、それは「日本の社会科学を作るという仕事」への参加のこと

6) 内田はプロテスタントのテキスト（聖書）輪読会が西欧近代の「自由な個人」の析出に寄与したと評価し、その先例に倣って、「学問を媒介とした諸個人の集合体」つまり読書会が、「(自由な個人からなる) 共同体の形成」を追求するにあたって「中核的意義をもっている」という。(談話「学問する市民社会」聞き手・山田鋭夫、1983 年 5 月、『形の発見』藤原書店、1992 年、98、105-106 ページ。)

この読書会を通じた自由な個人の形成と彼らによる新しい共同体との構築に対する期待、これを仮にサークル主義（一種の市民社会論？）というとするれば、それは本文で言われている社会主義において学問を媒介として自由な個体と生産手段の共同所有制度との循環過程が確立するという理念と発想において繋がっているが、前者から後者への発展には、制度的、体制的な条件の提示が必要であり、両者ともまだヴィジョンの段階にある。さらにのちに触れる、一人一人が古典と「全人間的に」向き合うことを勧める読書論（注 46 参照）とこのサークル主義的読書論とのあいだに溝があるように思われる。後者はいわば教え教えられるという水平的な相互啓発によって平均的な読み（共有しうる読み）への覚醒を意図しているとするれば、前者はサークルという集団を超えたところで、一人一人の孤独な読みの営為から、共有性・平均性を超えたその人独自の地平が開かれてくることを期待するものだからである。

だと明かされる。ここでは普遍的な社会科学ではなく「日本の」社会科学を作るといっていることに注目したいが、その学問への専心の決意をのちに——テキスト 2 の半年後——述べたのが、本稿の冒頭に引用した文である。

問題は第 2 の論点である。上の第 1 論点の加筆文のように、内田のいう社会主義の強みは、学問を媒介環として主体と制度との循環過程をもつこと、あるいはもちうることにある。それを受けて、そういう「社会主義的人間の強さ」を最近「つくづく」と感じるとともに、「社会主義とは何かを根本的に考えねばならぬと感じている」という文が加筆された。ここでいう「社会主義的人間」が、社会主義国の国民のことなのか、社会主義を志向するあるいはそれを支持する資本主義国の人間のことなのか、それともその両方なのか、この表現では判断がつきにくい。また内田がなぜ「社会主義とは何かを根本的に考えねばならぬと感じている」のか、どのように社会主義を考え直したいのかも明らかにされていない。

(テキスト 3) 「社会科学の視座」『作品としての社会科学』岩波書店、1981 年

マルクスは私的所有の生成と消滅を媒介にしながら自由な個体が開花してゆく次第を歴史において見ました。社会的に結合する自由な個体の開花が自己目的で、私有財産制度の廃棄はそのための——ただし絶対不可欠な——手段です。その自由な個体というのは、同時に学問創造の一環を受け持っている者でなければならぬと私は思います。学問の単なる受け手であるというようなことでは、いくらひまがあり「文化生活」を享受していても、しょせん社会に埋没した人間であって、とても自由な個体なんていうことはできない。自由な人間として特定の仕事を分担し、そのわが事を責任を持って遂行するために、高度な専門的な学問を駆使する。その自由な個体が、「生産手段の共有」の実をあげるためには、どういう装置が必要かという問題の設定と解決に参加してゆく。その循環をもっているのが社会主義だと思う。プラハではいま大変なことが起こっておりますけれども、これは未来社会

の問題でも他の国の問題でもない。われわれの問題でもありまして、私も日本の社会科学を作るといふ仕事に私なりに参加してゆくなかで勉強していきたくて考えております。

(『作品としての社会科学』66-67 ページ。『著作集』第8巻、56-57 ページ。)

テキスト3では、第1論点に関して、社会主義社会における自由な個体は、「高度な専門的な学問」を駆使し、「生産手段の共有の実をあげるための装置」の開発に従事すべきことがあらためて強調される。この装置というのは社会主義社会を運営するための知識や技術や制度などのことであろうから、自由な個体とは実質的には政治や経済のテクノクラートを意味すると思われる。他方、学問的成果を無批判的に消費するだけの者には「しよせん社会に埋没した人間」という烙印ステイグマが押される。高度な学問も専門性も身につけていない者は、テクノクラートの指示に従わざるをえない受動的かつ従属的な存在とみなされるからである。

第3論点にはまったく変更がない。テキスト3の最大の修正は第2論点に加えられた。すなわちテキスト2の波線部分が全面的に削除され、あらたに「プラハではいま大変なことが起こっておりますけれども」という一文に付け替えられた。この点に関して当時の状況をみておこう。

1968年1月、「人間の顔をした社会主義」を掲げてチェコ共産党第1書記にドゥプチェクが就き、市場経済の導入を初めとして、検閲の廃止、公安警察の縮小、言論・集会の自由など、ソ連型社会主義に対する改革を試み、これに呼応して知識人や労働者たち70名が6月27日に「2000語宣言」を公表し、共産党の官僚主義と権力主義とを批判して、自由化、民主化を押し進めようとした。このいわゆる「プラハの春」を目にして社会主義(陣営)の危機を感じ取ったソ連は、8月20日、ポーランド、東ドイツ、ハンガリー、ブルガリア軍とともにチェコに軍事介入をして、「春」を強制的に終らせようとした。これが内田のいうプラハの「大変なこと」である。

ちなみに内田が講演をした1968年10月1日までの内外の状況をみると、目白押しに重大事がおこっていた。国内では東大や日大を初めとしていわゆる

大学紛争が起り、講演前日の 9 月 30 日には、日大全学共闘会議を中心とする学生 1 万人と古田重二良会長（最高経営責任者）との「大衆団交」が徹夜で行われ、講演当日の 10 月 1 日には、佐藤栄作首相が団交を批判する事態にまで至っていた。内田とともに講演をおこなった羽仁五郎は、この年の 7 月に『都市の論理』を公刊し、いわゆる全共闘系の学生のなかの一部の支持を集めていた。海外では、パリの 5 月革命といわれる学生の反乱をきっかけに学生、労働者のゼネストが決行された。アジアでは、1964 年のトンキン湾事件を契機に北ヴェトナムへの空爆を開始して、ヴェトナム戦争への介入を深めたアメリカ政府は、1968 年 1 月の南ヴェトナム解放戦線と北ヴェトナム軍によるテト攻勢にさらされた頃には、国内の世論調査で半数近い国民から戦争反対の意思表示を受け、戦争の帰趨も次第に解放戦線＝北ヴェトナム側の勝利に傾いていることが明瞭になりつつあった。そのころのアメリカでは反戦運動が活発になると同時に公民権運動も次第に急進化して「ブラックパワー」が示威を強めていた。中国では 1966 年に始まった文化大革命が進行中であり、紅衛兵たちは『毛沢東語録』を掲げながら「ブルジョア的」とみなしたものを——人も物も制度も——破壊していた。他方で 1968 年 8 月 23 日の『人民日報』は、チェコに介入したソ連を「社会帝国主義」と批判していた。その他にも、ポーランド、スペイン、メキシコ等の諸国で学生や労働者たちの反乱が頻発していた。内田の講演はこうした時代状況のなかでおこなわれた。内田が講演で「この頃の情勢」と言ったのは、ここで挙げた特定の事件や事柄のことではなく、それらをあわせた複合的情况を指しているものと思われる。そこには日本の大学紛争も含まれているが、ひょっとすると一番意識されているのはそれかもしれない。

III 「逆行」する読みは正しいか？ —「発言」と「読み」との時系列関係—

既述のように、テキスト 3 で「プラハではいま大変なことが起こっております」と現在進行形でチェコ事件に初めて言及された。これをもって、テキスト 2 の「私は最近、……社会主義的人間の強さというものをつくづく感じさせられたと同時に社会主義とは何かを根本的に考えねばならぬと感じている」

という箇所、さらにはテキスト1の「この頃的情勢」をともにチェコ事件にかかわる記述とみなしうるだろうか。内田の「社会科学の視座」の発言（公表）順と、それを逆に遡行する読みを図1に示す。左側に発言順を、右側にテキストを逆に辿って読む順を矢印で示しているが、テキスト3から、テキスト2を飛ばして、テキスト1へ遡行する読みもヴァリエーションとしてありうる。

図1 「社会科学としての視座」の時系列と読み



図1の右側のような遡行する読みが正しいとすると、疑問がいくつか生じる。

第1に、テキスト3とテキスト2との関連である。テキスト2もチェコ事件に関する記述だとすると、「社会主義的人間の強さというものをつくづく感じさせられた」とは、自由を求めて立ち上がったチェコ国民の「強さ」に感動したということであり、「社会主義とは何かを根本的に考えねばならぬと感じている」とは、チェコ国民の意志を力で弾圧しようとしているソ連を始めとする社会主義国の行為に対する批判と読むことができる。ところが、テキスト3では、「プラハではいま大変なことが起こっておりますけれども」という事件への単なる言及にとどまって、チェコ国民への賛意とソ連型社会主義に対する批判が撤回されたことは、内田の立場がテキスト2のそれから後退したとみなされるだろう。テキスト3はテキスト2の12年後のものであり、この間にチェコ事件についての検討を深める時間的余裕も各種の情報も十分にあり、またテキスト3の前年1980年には、ポーランドで自主管理労組「連帯」が結成されていただけにおさらテキスト2の当該箇所の削除は不可解である。第2に、テキスト1もチェコ事件に関する語りだとすると、チェコ事件は「賭ける

ことで学問していく社会主義の強さ」の証ということになるが、両者の論理的な関係を読みとることはむずかしい。

第 3 に、初めからチェコ事件が想起されていたとすれば、1968 年の講演や 1969 年のエッセイで、なぜそれを明示しなかったのか、逆にいえば、講演から 13 年もたった 1981 年になって、なぜそのことをテキスト 3 で明示したのだろうか。これに対して、1968 年～69 年頃の内田は、チェコ事件の重大さは感じていたが、その評価を未だ確立しえていなかったからだと答えられるかもしれない。ソ連を初めとする 5 か国軍がチェコに侵入したのは 1968 年の 8 月 20 日のことであったが、その 5 日後には、中野好夫、久野収、丸山眞男を代表者とする「日本の知識人のアピール」が『朝日新聞』に掲載され、「世界のすべての国民は、みずから政治体制を決定する基本的権利をもつ。ソ連を主力とする 5 ケ国の今回のチェコ占領は、この侵すべからざる権利を武力によって抑制しようとするものであり、われわれは激しい憤りを禁じえない。(中略) われわれは、人間の尊厳と自由との勝利を信ずる世界の人たちが、東西いずれにあると問わず、われわれとともに抗議の意志を表明されるよう心から訴える」と呼びかけた。⁷⁾ このアピールには上記 3 名を含めて 50 名が賛同署名者として名をつらね、石川滋、伊東光晴、大塚久雄、隅谷三喜男、都留重人、出口勇蔵、宮崎義一の経済学者もそこに加わっていた。内田の名はそこにはない。こうしたアピールにはいっさい加わらないという原則をたてていたのだろうか。それともアピール文にある「われわれは、ベトナム戦争に一貫して抗議した者のみが、ソ連の武力行使に真の抗議の声をあげる資格をもつと考える。」という一文にこだわったからだろうか。同じ経済学史家の小林昇と対照的に、⁸⁾ 内田はヴェトナム戦争に対する態度を公にしていなかったからである。しかしヴェトナム戦争に一貫して抗議した者のみがソ連に抗議する資格があるというアピールの主張は、特権的立場に身をおいた者のもの言いであり、またイデオロ

7) みすず書房編集部編『戦車と自由——チェコスロバキア事件資料集 1, 2——』みすず書房、1968 年、第 2 巻、329 ページ。

8) 拙稿「小林昇の戦争体験と戦後非啓蒙のひとつの基点」『経済学論究』（関西学院大学経済学部）第 62 巻第 2 号、2008 年 9 月参照。

ギー的強制に陥りかねない危険な臭いがある。極端に言えばヴェトナム戦争に賛成してきた者でもソ連に抗議しうる。たとえアピール署名者と政治的立場が違っても、ソ連の軍事介入に反対という一点からアメリカのヴェトナムへの軍事介入に対する対話が成り立つ可能性がある。内田はアピールのこうした特権者の立場に頷けなかったのだろうか。アピール不参加の理由はわからないが、武力鎮圧に賛成ではなかったであろうから、チェコ事件に対する評価を定めなかったという上の仮説はおそらく成り立たないように思われる。内田は当時もそして1981年においても社会主義に期待をかけていただけに（テキスト1、2、3の前半部分参照）、事態の推移に当惑を覚えていたというのが真相に近いのかもしれない。

第4の問題は、テキスト1とテキスト2の「社会主義の強さ」、「社会主義的人間の強さ」を体现するのはこの頃のチェコとチェコ国民であって、ソ連とそれに追随する社会主義諸国ではないとすると、社会主義の強さは、現存社会主義国の多数派にではなく、それに異を唱える少数派のチェコに例外的にみられることになる。そうすると「社会主義一般」の意義を、学問に賭ける自由な個体と共同所有の制度との循環関係が確立する点に見出す内田の主張にほころびが生じかねない。それを回避するには、社会主義の異端派にこそ正当性があることを、あるいは多数派の社会主義に内田の期待するような自由な個体が生まれえない事情を説明しなければならない。

以上の疑問が氷解しない以上、テキスト3からテキスト2、さらにテキスト1へと遡行する読み方には無理がある。言い換えれば、「社会科学の視座」を『作品としての社会科学』（それゆえ『著作集』）に収録された版をもって代表させることはできない。講演、『思想』掲載のもの、『作品』所収のものは、それぞれの時点における内田の思想を表すテキストとして固有の意義があり、したがってこれらの三つは独立のテキストとして扱うべきである——これが私のテキスト処理上のとりあえずの結論である。

IV 「フィクション」＝「作品」作り

すでにみたように、内田は加筆や削除などをおこないながら繰り返しテクス

トに修正をほどこしている。これは聴く者、読む者にとっては戸惑いを覚えることであり、またテキスト間の差異に注目する者にとっては比較検証という労を強いられることである。それを承知で(?)なぜ内田は反復修正をしたのだろうか。その答えは『作品としての社会科学』の「あとがき」に記されている。

〔本書は〕……専門家にはなく一般の読者に対して、その玩味と評価を念頭に執筆・編集した点では……『日本資本主義の思想像』(1967年)、『学問への散策』(1974年)と同じであ〔る〕。(中略)大患〔1974年〕の回復期に書きたいいくつかの論説には……さまざまな領域に分散している私の仕事の本来の意図と方法が、……浮かび出していた。私は……そこに(既に)浮かび出ているものに透徹した、読みに耐える表現を与えるべく、そのかぎりでも——しかしその限りで記録性を無視して——徹底的な加筆を行うことを決めた。その結果が本書である。

通常の意味での記録性を無視して加筆をおこなった本書では、——とくに講演は、いずれもその時におけるその時の私の再現を企図したものであるが、加筆時に意識的に構成したフィクションとしての性格をもつものと了解されたい……。」⁹⁾

ここでは注目すべきことが二つ言われている。一つは、内田自身の命名による「三部作」すなわち『日本資本主義の思想像』、『学問への散策』そして『作品としての社会科学』は、「専門家」ではなく「一般の読者」向けのものであること、つまりは、三部作のようなエッセイ類と経済学史の専門書や論文とでは、想定する読者が明確に区別されている。同じように執筆意図も異なる。さきにも述べたように、エッセイは学問的成果に向かっただの模索過程(学問への散策)の産物であるから、一般読者にはその学問の創造過程の「玩味と評価」が期待されている。内田の好む表現で言い換えれば、一人一人の一般読者が、学問のたんなる受け手に終始するのではなく、内田とともに学問の創造過程に

9) 内田義彦『作品としての社会科学』「あとがき」377-379ページ。『著作集』第8巻、1989年、311-312ページ。

苦闘しながら「参加する」ことで、内田の意図と中間成果とを正しく汲み取ることが求められる。ただ読者から内田へのフィードバックについて触れられていないので、内田が読者に期待するのは自分の学問の制作過程に対する読者の玩味と評価だけのように見受けられる。¹⁰⁾ それに対して専門書や専攻論文のばあいは、専門家の厳しい批判的検討と評価とをへて（フィードバック）、学問それ自体として継承・展開されることがおのずから期待される。

もう一つ注目すべきことは、エッセイをフィクションとして創作するという記述である。講演をエッセイに衣替えをするにあたって、講演の録音や速記録を忠実に文字「記録」として再現するのではなく、エッセイに「意識的に構成したフィクションとしての性格」を与え、いまに「再現」しようとする。そのフィクション作りのために「徹底的な」加筆や削除、ときに内容の変更がほどこされる。こうしてできあがったエッセイに再び手を加えてもう一度あらたなエッセイを作るばあいにも、そのフィクションライゼーションの意図は上と同じである。これはいわば内田の手の内の公開である。

内田のいう「浮かび出ているものに透徹した、読みに耐える表現」を与えるというのは、たんに話し言葉を書き言葉に改めることではない。内田はエッセイに仕立て直すときも、もとの講演の話し言葉の文体を踏襲している。この文体の選択は、エッセイの著述を言語行為として、つまり読み手に感銘を与える呼びかけ・語りかけをおこなうことで、かれらの言動に影響を与えようとする言語行為として強く意識したものである。あえていえば、そのことに事柄の分析・記述よりも優先的地位が与えられている。

さて、上の「透徹した、読みに耐える表現」を与えるというのは、講演で話した事柄を、そのときのコンテクストを踏まえながらも、そこから離れて、そのかぎり「記録性を無視して」、その後の内田の思考の展開や現在の問題意識を踏まえて、エッセイという衣装のもとで新しいコンテクストを作り、語られる事柄に新しい生命を吹き込んでアクチュアリティを生み出そうとする試み

10) 内田に「評価と玩味」という短文がある。これは『思想』No.576、1972年6月に掲載の「思想の言葉」を『学問への散策』に収録するにあたってこのような題に改められたものである。玩味にアプリシエイトのルビがふられている。

である。¹¹⁾ そのエッセイにさらに手を加えるのも文章表現の彫琢のためではなく、上と同様の意図のもとに同じ操作をおこなうためである。それが内田のいうフィクションを意識的に構成するということである。そのばあい最初のコンテキストは消去されるのではなく、その上に新たなコンテキストが重ね合わされ、その重層的なコンテキストのなかで、語られることの新たな意味あい¹²⁾がフィクションの形をとって提出される。「社会科学の視座」のテキスト 1 とテキスト 3 との関係でいえば、テキスト 3 の「プラハではいま大変なことが起こっておりますけれども」というくだりは、講演時の「この頃の情勢」（それが何か具体的に明らかにされていない）というコンテキストと、チェコ事件という新たなコンテキストが重層され、そうして 1981 年に「プラハではいま大変なことが起こっております」と明示的に語ることの意味が紡ぎ出される。同様に、テキスト 1 とテキスト 2 との間にも、またテキスト 2 とテキスト 3 との間にも類似の操作がおこなわれている。

このようにある事柄とそれに関する自分の呼びかけ・語りを繰り返し問い直し、それをあらたなコンテキストのなかに位置づけて語り直す、あるいは語り直し続けること（エッセイの創作と改作）であらたな意味を発見しようとすることは、その思想に時代とともに呼吸するというダイナミズムをもたせ、そうすることで先にも述べたように、内田自身のアクチュアリティを獲得しようとする営為なのである。

この内田の営為あるいは操作は読者側に読みの下準備を要請する。まずテキスト・クリティークである。それを怠ると、同一テキストの変遷（重大な差異）を見落として、『著作集』に収録されたテキストにもっぱら依拠して読むことになる。さらにテキストがフィクション（虚構）であることにも十分な配慮が

11) 木村敏は精神病理学の立場から「リアリティ」と「アクチュアリティ」とを区別して、「リアリティは現実を構成する事物の存在に関して、これを認識し確認する立場から言われるに対して、アクチュアリティは現実に向かってはたらきかける行為のはたらきそのものに関して言われる」とする。たとえば離人症のばあい、「外界の事物の物理的存在が認知され」、リアリティは失われていないにもかかわらず、「患者が世界に対する行為的な関与の遂行感を失った結果として現実感」つまりアクチュアリティが希薄になり、両者の乖離が生じるという。（木村敏「偶然性の精神病理」岩波書店、1994 年、岩波現代文庫、2000 年、13-15 ページ。）

求められる。いうまでもなく虚構は嘘ということではない。逆にそこに書かれていることをあたかも^{まこと}真と信じて疑わないのもフィクションとしてのエッセイを読み誤ることになる。エッセイのフィクション性とそこに語られていることの事実との突き合わせ（検証）とを弁別し、その二つの混同を避けながらエッセイ全体をあらためてフィクションとして読み取ることが求められる。

V フィクションとレトリック — 『最後の一句』から『三人の隠者』へ—

前節で、内田の自己言及のテキストにフィクションの問題があることを指摘したが、ここではそこにレトリックの問題が絡まっていることを紹介したい。取りあげるテキストは、『学問への散策』に収録された「憂と献身」と「僧正と三人の隠者の話」とである。「憂と献身」で内田は、外国語の翻訳に細心の注意と苦心を傾けた鷗外の姿勢に、文人と官吏との二つの顔をもつ鷗外その人の生き方の緊張と苦悩とがあらわれているという。次の**テキスト 4**の箇所は、フォルシュング (Forschung) というドイツ語に照応する適切な日本語が存在しないこと、つまりそうした日本語を生み出しえなかった日本の学界の権威主義的な体質や社会の非科学的な土壌に対する鷗外の悲嘆に思いを寄せながら、鷗外の『最後の一句』を思い出した、という趣旨の文である。

〔テキスト 4〕 「憂と献身」 『図書』1971年

フォルシュングという言葉、日本の中に、自分の中に、探求・探究^{フォルシュン}しつつ（すればするほど）俗吏であるしかないところの自分の意識を深めていったのが鷗外ではないか。

鷗外がしょいこんだ訳語の問題が気になりだした時ふと心に浮かんだのが、『最後の一句』である。……これほどすざましい作品を知らない。読むたびに深みを増してくる。

（「憂と献身」『図書』岩波書店、1971年11月号、199ページ。）

「最後の一句」は次のようにして発せられた。難破した持ち船から米を運び

出し、それを勝手に売った廉で捕縛された船主桂屋太郎兵衛は、斬首の刑に処せられることになった。それを耳にした三人の子供は父の身代わりを申し出る。万が一願いが聞き届けられたら、父の顔みることができないがその覚悟あるかと役人に問い糾され、長女いちは「お上の事には間違はございますまいから」と答えたのである。いちのわが身を捨てての「献身」が言わしめたこの最後の一句に、お上というものはしばしば過ち犯し、その災厄はいつも為す術をもたない弱い庶民に降りかかるのだという非難が——いわば「献身の中に潜む反抗の鋒」^{ほこさき}——が毒として秘められていた。¹²⁾ いちの献身はドイツ語のマルチリウム (Martyrium) = 「殉教」にも通じており、内田はその献身・殉教の行為に隠されているものを鵬外のフォルシュングから連想したのである。鵬外は『妄想』(明治 44 年、1911) で、フォルシュングに「研究」といった「ぼんやりした」訳語をあてるのでは実際には役に立たないと言っているが、内田もフォルシュングにここでは献身と同種のもを、つまりわが身を対象に没入し、投企することで新しい知見を切り拓くという意味を読み取っているように思われる。

1971 年に公表された「憂と献身」がその 3 年後に『学問への散策』に収録されるにあたり、分量にして 2 倍以上の文が追補され、しかも重要な内容が付け加えられた。テキスト 4 の箇所についていえば、下記の**テキスト 5** の下線部がそれにあたる。そこでは『最後の一句』から、内田がそれと同質の作品とみなすトルストイの『三人の隠者』(1886) へ話が展開し、後者の作品を読むにいたって、『芸術とは何か』(1897-98) で表明されたかれの有名な文学上の「転向」、すなわち過去の自作品をすべて否定するという一大回心を初めて納得しえたという。

(テキスト 5) 「憂と献身」 『学問への散策』1974 年

フォルシュングという言葉、日本の中に、自分の中に、探求・探究しつつ (すればするほど) 俗吏であるしかないところの自分の意識を深めて

12) 森鵬外『最後の一句』、『山椒太夫・高瀬舟』岩波文庫、2002 年所収、106-107 ページ。

いったのが鷗外ではないか。

鷗外がしょいこんだ訳語の問題が気になりだした時ふと心に浮かんだのが、『最後の一句』である。……これほどすさまじいものを残して静かな文章を私は知らない。と書くのは書きすぎだろうけれども、同質の作品を読むときほとんど常に私はこの作品を思い出す。たとえばトルストイの『三人の隠者』。あの、三人の隠者が浪の上を渡ってくるすさまじい数行によって私は、それまで納得どころか理解の域にも入らなかったトルストイの転向（文学作品すべてを捨ててただ民話をという、文学論上の転向）を納得しえたのであるが、その時思い出したのが、やはり、この『最後の一句』であった。

（「憂と献身」『学問への散策』1974年、199ページ。『著作集』第6巻、163-164ページ。下線部は『学問への散策』で追補された箇所。）

鷗外の「献身」からトルストイの「転向」へのプロットの展開にあたって、『三人の隠者』の結末を読者に想起させるというレトリック（換喩法）が使われている。トルストイの転向への言及は唐突のようにみえるが、その意味するところは、テキスト5の1年前に書かれた「僧正と三人の隠者の話」（テキスト6）で明らかにされる。このエッセイも『三人の隠者』に題材をとっている。

〔テキスト6〕 「僧正と三人の隠者の話」1973年

トルストイが全作品を捨てて民話だけといった時、私はどうしても彼の回心を納得することができなかった。……『芸術とは何か』その他の彼の芸術論は、私を納得させるどころか、反感さえ持たせただけである。

（中略）

回心問題が突如問題として理解の場に達したのは戦後である。安易な——と私には思われた——民主主義の解放感の中で、私は何をどうやるか考えていた。その時、ふと『三人の隠者』を思い出した。あらためて読んでその本は怖ろしい本であった。全作品を捨てるといいきったトルストイの言葉が、海を渡る三人の隠者の姿のように、迫力をもって迫ってくる。

私は安易な民主主義的解放感を他人事として考えていた自分に恥じた。呆れたといってもいい。（中略）

いい芝居を観た時、社会学者でありそういうものとしてパンフレットなどにも筆をとる私はこの作品を思い出し、あの有徳の僧正の心境を思いやるのである。」

（『僧正と三人の隠者の話』『劇団東演ニュース』1973年10月25日、2ページ。『著作集』第6巻、185-186ページ。）

ここで内田は、トルストイの文学上の転向を回心と言い換え、両者を同じものと見なしていることに留意したうえで、引用文の要点を箇条書きにする。(1) 内田はながくトルストイの芸術上の転向＝回心について納得できないだけでなく反感さえ抱いていた。(2) その回心が腑に落ちたのは、戦後の「安易な民主主義的解放感」のなかで自分の進むべき道を悩んでいたときに、『三人の隠者』を再読したことによる。(3) トルストイの回心に理解がおよんだとき、民主主義的解放感を「他人事」として考えていた自分を恥じ、呆れた。(4) その後も、いい芝居を観たり、請われて芝居のパンフレットに「社会学者」として筆をとるとき、『三人の隠者』の僧正のたどりついた心境に思いを馳せる。

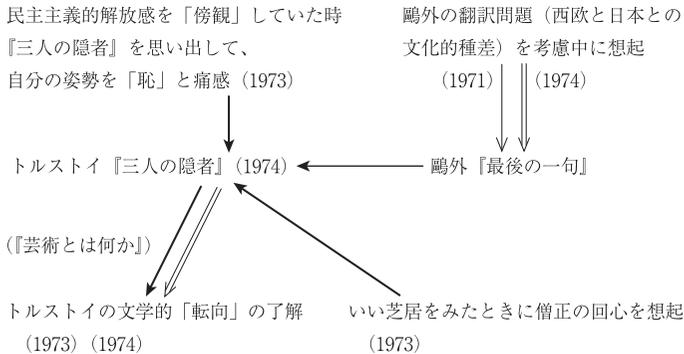
『三人の隠者』は次のような民話である。僧正は、ある島で神に仕える行を自己流におこなっている3人の隠者の話を聞き、かれらに会って正しい神学解釈と信仰形式とを教えた。隠者たちはそれを覚え、僧正は満足して島を離れる。そこへ隠者たちが海上を駆けるように僧正を追いかけてきて、「わしらはあなたのお教えを忘れてしまいました！ どうぞ、もう一度教えて下さい」と懇願した。それを聞いた僧正は、「おまえさんがたに教えるものは、わたしではありません。おまえさんがたこそ、わしら罪人のために祈って下さい！」と告げ、隠者たちに深く頭を下げた（中村白葉訳「三人の隠者」トルストイ民話集『イワンばか 他八篇』岩波文庫所収）。

この民話のテーマは僧正の回心にある。僧正は、市井にあつて正しい教義や祈りの形式を心得ないままにひたすら神に祈る隠者こそ、正統と権威に墮ちた「罪人」というべき自分よりもよりいっそう神の近くにいる人たちだと悟るの

である。その寓意は、神と民衆信徒の間に立ちはだかつて信仰への道を妨げているギリシア正教会と形式に流れる権威主義的な高位聖職者に対する批判にある。内田によれば、戦後のある時代的コンテクストのなかで、僧正の宗教的回心（隠者体験）が初めて腑に落ちて、トルストイの文学上の転向にたいする年来の疑問も氷解したのである。

内田はこのような『三人の隠者』の再読体験を1973年に「僧正と三人の隠者の話」で公表し、それを経てその翌年に「憂と献身」に『三人の隠者』のことを書き加えたのである。したがってテキスト5の叙述は、テキスト6と読みあわせることでその含意が明白になる。テキスト4, 5, 6で『三人の隠者』と『最後の一句』がどのようなコンテクストのなかで言及されているか、それを図示したのが図2である。細い実線が1971年の「憂と献身」、二重線が1974年の「憂と献身」、太い実線が1973年の「僧正と三人の隠者の話」での関連を示している。

図 2



最初は（1971年）、鷗外の翻訳と『最後の一句』とを結びつけて日本の学問と文化について語るという構図をとっていたものが、次にはその『最後の一句』から『三人の隠者』へ連想を広げ、トルストイの「転向」問題について1973年と74年に相次いで言及し、そのトルストイとの対比で、戦後のある時期の

自分の「傍観」的態度を回顧するにいたる。しかし内田がこのような連想（論理的な因果連関）を実際に辿ったと考える必要はない。あくまでもそれぞれのフィクションの構成にあたって、『最後の一句』や『三人の隠者』や観劇といった素材が説得の効果をあげるためにこのような形で配されたと受けとめるべきである。というのも、内田はレトリックを定義して、「どうトピックをきめ、どういう風に話し進めたら相手方の納得、同感を得られるかという技術」といい、¹³⁾ また「話し手と聞き手の双方の協働による現実の論理的考究と再現の術」だといっているからである。¹⁴⁾ 読者はこのレトリックを駆使したフィクションとしての構成の妙から虚構による真実を嗅ぎとるべきであろう。

それではこのようなフィクションとレトリックとによって、内田は何を語ろうとしたのだろうか。この問題に向き合う前に、**テキスト 6** の不明な点を先にみておきたい。内田が「安易な」と感じていた「民主主義の解放感」というのは戦後のいつの頃のことだろうか。私の結論を先にいえば、1948 年から 49 年ごろのことである。「民主主義の解放感」という表現から、GHQ（連合国最高司令官総司令部）が主導した民主化政策に国民の期待が高まっていた敗戦直後の時期のことのようにも思われる。この期待感は 1947 年 2 月のマッカーサーによる 2・1 ゼネスト中止命令まで続くのだが、このころの内田はテキスト 6 にいうような「私は何をどうやるか考えていた」という迷いのなかにはなく、むしろ民主化政策を基本的に支持し、言論活動（啓蒙）をおこなっていた。しかし 1953 年になると、内田はこの時期の自分を否定的に総括する文を公にする。

ぼくは、戦後のいわゆる「民主化」政策に完全にひっかかった一人である。もちろんその限界は当時のぼくにもわかっていて。しかしぼくは、当時、それを一つの「限界」としてしかうけとめることができず、日本の民

13) 内田義彦「アダム・スミス——人文学と経済学——」『思想』No.631、1977 年 1 月、15 ページ。『作品としての社会科学』118 ページ、『著作集』第 8 巻、99 ページ。『思想』掲載の文は『作品』所収のさいに少し加筆がなされている。

14) 同上。ただし最初の『思想』掲載文にはこの文章はなく、『作品』で加筆された。

主化はその方向をつきぬけるよりは他途はないようにおもっていた。お巡りがサーベルの代わりに、あの不格好な棒切れをもたされたとき〔1946年3月施行〕、ぼくは一寸快哉をさげんだ。あの棒切れがじつは櫂の楳棒であり、学生や労働者をなぐりつける武器としては、サーベルよりはるかに有効なものであることにぼくは気がつかなかった。いわんや、そのすぐあとにかれらが、大きなピストルとタンクをもって武装してあらわれることは全く見ぬきえなかったことである。そして、おもい返してみると、それは「近衛新体制」の本質を本当に見ぬきえなかったことと全く同じ原因からきているとおもう。¹⁵⁾

敗戦後、国家の統治制度に対する改革に着手されたが、それは戦前・戦中の統治の非合理的で暴力的な性格を改善することに寄与した半面、国民に対する「合理的な支配」を洗練されたかたちで強化する面をも併せ持っていた。内田はこの合理化あるいは近代化の二面性を十分に把握できていなかったために、民主化政策の一面だけに目を向けてしまい（その典型例が警察の見せかけの民主化）、結果的に民主化政策に「完全にひっかかった」と自省せざるをえなくなったのである。

ここには微妙な問題がある。日本政府はGHQの民主化政策を不承不承遂行したのかも知れないが、当時の共産党は、占領軍を解放軍あるいは民主革命の同盟軍と規定して、「平和革命」路線を採用していた。この共産党のGHQに対する協調的姿勢が転換されたのは、1947年12月の第6回大会においてだといわれている。このような事情を勘案すれば、内田が民主化政策にひっかかったと書いたとき、当時の共産党の路線にもひっかかったということが重ね合わされていたのだろうか。そう言わないまでも、共産党に対する複雑な思いが、それだけに明言できない思いが伏在しているのかも知れない。¹⁶⁾

15) 内田義彦〔書評〕『日本資本主義講座』第1巻『日本資本主義の崩壊』、岩波書店、1953年『図書新聞』219号、1953年10月31日。『著作集』第10巻、1989年、288-289ページ。なお『著作集』では「『日本資本主義講座』によせて」と改題されている。

16) 内田と共産党との微妙な関係については、福島新吾「内田義彦——What was he?——」『専修大学社会科学研究所報』No.447、2009年9月20日、9、12-16ページ参照。

上の引用文にもうひとつ注目すべき言がある。戦後の民主化政策の本質を見抜きえなかったと同じ理由で、戦時中の「近衛新体制」(1940～41年)の本質も見抜きえなかったとさりげなく書かれていることである。「近衛新体制と内田」の問題は別に検討を要することであるが、ここで内田が「同じ理由」といっているのは、民主化政策のくんだりから類推すれば、近衛新体制とりわけ経済新体制の「限界」を知りながらも、企画院が立案した「産業合理化要項」(1940年8月)に代表される見せかけの合理化路線を行くしか「途はないようにおもった」ということであろう。生産力拡充のための産業の合理化——その一つは経営管理者の地位向上——に期待をかけ、その限界を限界として突き詰めて考えぬくような、批判的思考の徹底性に欠けていたということである。言い換えれば、事の両義性を見極める「複眼」的なものの見方がこの時期にはまだ成熟をみていなかったともいえる。そのため戦時の近衛新体制を誤認した教訓を戦後に活かすことができず、戦後の民主化政策にたいしても同種の対応の失敗を繰り返してしまったということであろう。¹⁷⁾

さて、上の自己言及(自己批判?)の文は1953年に公にされたものだが、民主化政策の誤認に気づいたのはそれよりもっと早く、おそらく2・1ゼネスト中止からそう遠くない時期だと推測される。その民主化政策に「ひっかかった」との自覚が、テキスト6のいう「私は何をどうやるか考えていた」という思案の間^まを生み出したのである。別のエッセイで、「僕は自分の世界が後れ、うすばけている」とそのころの心境を吐露しつつも、「僕は取り残されているとは思わなかった」といい、¹⁸⁾ 同時代の風潮に対しては、「安易な民主主義的解放感」と少し距離をおいて眺めていたという。その民主主義的解放感は戦後直後のそれとは違い、閉塞のなかの高揚というべき奇妙な解放感であり、内田が「安易な」と形容する理由もそこに由来している。それを瞥見しておこう。

2・1スト中止直後の1947年3月にトルーマン・ドクトリンが発表され、自

17) もっとも戦後すぐに内田は、「民衆自身が巨大な社会的複眼を構成する」ことが民主化の要だと説いていた。内田義彦「新聞と民主主義」『大学新聞』第44号、1945年11月11日。『著作集』第10巻、21ページ。

18) 内田義彦「チェーホフと僕」『未来——芸術と批評——』第2集、1948年11月、130ページ。『著作集』第6巻、110ページ。

由主義国家群の脅威となる「全体主義」（ソ連）との対決、いわゆる「冷たい戦争」の開始が宣せられた。翌1948年の1月には、ロイヤル米陸軍長官が、日本を「こんご極東で起こるかもしれない新しい全体主義の脅威に対する防壁にする」と演説し、対日政策の変更を予告した。同年7月には公務員の団体交渉権、罷業権などを否認する「政令201号」が即日施行され、10月にはアメリカの国家安全保障会議は、「アメリカの対日政策に関する勧告」を承認して、占領政策の重点を従来の民主化・非軍事化から経済復興へ移すことを決め、「逆コース」が本格的に開始する。この逆コースを経済面から具体化するために、48年末に「経済安定9原則」がGHQから日本政府に示され、それにそって翌49年3月から超均衡財政によって一挙にインフレを収束させることを目指したドッジ・ラインが実施に移された。インフレは収まったものの逆にデフレに陥り、いわゆるドッジ不況が起こった。49年4月に「団体等規制法」が制定され、7月には10万人にもおよぶ国鉄の人員整理が実施され、同じこの月に、GHQの民間情報教育局顧問のイールズが新潟大学で「共産主義教授」の追放を訴える講演をおこなったのを手始めに、11月から12月にかけて岡山大学や広島大学などでも同趣旨の講演をおこなった。9月には、九州大学で赤色教授に対する辞職勧告がなされ、富山大学、新潟大学などでも同種の勧告がおこなわれた。9月から10月にかけて、教員定数条例によって、静岡、三重、石川、熊本などで教員レッドパージがおこなわれ、翌50年7月に本格的に始まるレッド・パージの先触れとなった。50年2月にはアメリカでマッカーシー旋風が吹き始め、6月25日には朝鮮戦争が勃発した。

朝鮮戦争に行きつく冷戦の開始と逆コースの進行のなかで、その対抗運動も高まる。1947年の12月の共産党の大会で反占領軍戦術への転換が決定されたことはすでに触れたが、それと連動して共産党の「近代主義」批判のイデオロギー・キャンペーンが始まり、大塚史学、主体性論、近代文学派などが俎上にのせられ、¹⁹⁾ 東大法学部では丸山眞男、川島武宜が近代主義のイデオログとみなされていた。他方で、丸山や川島は辻清明とともに「アカ」とみなされてレッドパージの対象とされていたというから、²⁰⁾ かれらはGHQ・日本政府と

19) 1948年8月発行の『前衛』30号は、「近代主義の批判」を特集しているが、その先月には「近代主義をめぐって」という座談会が『季刊思想と科学』第2号に載った。

20) 『丸山眞男座談』2、岩波書店、1998年、342ページ。

共産党との両方向から挟み撃ちにあっていた。48 年 3 月ごろから労働運動が激化し、4 月には東宝争議が本格化する。このころから出隆、梅本克己、赤岩榮、森田草平、杉浦明平らの知識人、文学者たちが相次いで共産党へ入党したといわれている。6 月には「教育復興」を掲げて、全国の大学、専門学校 113 校が一斉にストを実施し、9 月に結成された全学連は 50 年 8 月にレッドパーヅ反対闘争宣言を発して、以後全国の大学で試験ボイコットをおこなった。他方政治では、49 年 1 月に実施された衆議院総選挙で、社会党が前回（47 年 4 月実施）の 143 議席から 48 議席に劇的な敗退を喫したのに対して、共産党は 0 から一挙に 35 に議席を伸ばした。そうした状況を背景に、48 年から 49 年にかけて「革命」の風説が飛び交った。共産党は 48 年の秋にも革命が起こるといふ「幻想」をふりまいて、8 月には職場離脱戦術をとり、組合のアクティヴ 1700 名を職場から飛び出させたという。²¹⁾ 上に記した 49 年 1 月の総選挙直後の民科（民主主義科学者協会）の評議員会は、「多数の共産党員が当選したという余勢をかってまことに勇ましい発言が多く、……今にも革命が達成されるだろうというような雰囲気のみちた会合だった」といわれている。²²⁾ 4 月に開催された同じく民科の全国大会で、山田勝次郎は「もう半年もすれば、人民政府が生まれる。困難にめげずに、今は政治活動にはげむべきである」といふ共産党科学技術部のメッセージを披露し、²³⁾ いわゆる 9 月革命説がふりまかれた。当時共産党員であった色川大吉も 6 月に世田谷公民館で、徳田書記長の「9 月までに民自党を必ず打倒する」といふ演説を聞いて驚いたという。²⁴⁾ 内田は 1948 年 1 月に民科の幹事に選ばれ、翌 49 年 4 月には評議員に選出されている。内田が上記の評議員会や大会に参加したかどうか不明だが、一部の民科会員の革命的な気色を知っていたであろう。

こうした当時の状況を踏まえれば、内田がテキスト 6 で「安易な民主主義的解放感」といい、別の小文では「朝鮮戦争前の安易な解放感」と呼んでいるも

21) 小田切秀雄『私の見た昭和の思想と文学の五十年』上、集英社、1988 年、386 ページ。

22) 柘植秀臣『民科と私』勁草書房、1980 年、128 ページ。

23) 兵本達吉『日本共産党の戦後秘史』新潮文庫、2008 年、92 ページ。

24) 色川大吉『カチューシャの青春——昭和自分史 1950-55 年——』小学館、2005 年、14-15 ページ。

のは、²⁵⁾ 9月革命説に象徴されるような、1948年から49年ごろの実体をとまなわなない、国民の多くからは遊離した革命的気運の高揚のことである。それは逆コースの進行にたいする危機感とそうした時代状況を革命の好機ととらえる見方とが醸成したものである。

それではその民主主義的解放感を安易と感じ、他方で「自分のおかれてい場所を自覚すること自体が、当時、散らされている情報の断片断片を読み取り、自分の眼でたしかめながら再構成するという仕方によってしか、できなかった」というような手探り状態にあった内田が、²⁶⁾ 『三人の隠者』を再読するや、なぜその解放感を他人事として考えていた自分を恥じ、呆れたのか、またそれでどうしようとしたのか。この傍観の悔恨とその処置、それがテキスト6の勘所なのだが、その肝心なところになると、叙述は難解なものになる。さきに引用したテキスト6で(中略)とした箇所がそれにあたる。

むろん彼〔トルストイ〕の全作品を捨てる気には毛頭なれないが、そして、そのような主張をする人がもしかりにあったとすれば彼の芸術論を読んだ時以上の反感を持ち、敵として戦うであろうことは疑いないが、民話こそすべてという表現にまで凝結してゆく彼の思想こそが彼の全作品を生みかつそれを支えているものであることは争いがたい。『三人の隠者』を理解しうる人と理解し得ぬ人の二つに人間を分かちうる、といつていいと

25) 内田義彦「火山灰地」『図書新聞』617号、1961年8月19日。『学問への散策』収録文では「透明の功罪——『火山灰地』評——」と改題。『著作集』第6巻、208ページ。

内田は平田清明との対談で、「『潮流』論文〔「戦時経済学の矛盾の展開と経済理論」『潮流』1948年1月号のこと〕から『生誕』までの時期にはいってみれば安易な解放感の中でのデモクラシーの問題があった」と語り、「安易な解放感」が『生誕』が出版された1953年まで続いていたとしている。（『歴史の主体的形成と学問』『名古屋大学新聞』305号、1968年9月26日号、第2面。『読むということ——内田義彦対談集——』筑摩書房、1971年、215ページ、『著作集』第7巻、1989年、527ページ。）

26) 前掲「火山灰地」『著作集』第6巻、208ページ。しかし本文の引用文に続けて、「その安易な解放が挫折し、おくればせながら、も一度、本源的な視点に立って抵抗の姿勢の組み方そのものを考えてゆかねばならぬ、という時点」（傍点竹本）にいま立っていると言っているから、内田はかつての安易な解放感を否定的のみ評価しているのではなく、少なくとも1961年当時は、むしろそれを批判的に継承する意志があったようにみえる。

すら考えられるのである。あるいはまた、表現についていえば、……終りの数ページの凝縮力に圧倒されその凝縮を何とかして自分の作品にと希求する人とそうでない人の二つに、といってもいい。

(「僧正と三人の隠者の話」『劇団東演ニュース』1973 年 10 月 25 日、2 ページ。『著作集』第 6 巻、185 ページ。)

トルストイの作品のなかで民話しか評価しない人に対して「敵として戦う」といった大仰に聞こえる言い方（どのように戦うのだろうか）、また『三人の隠者』を理解しうる人としえない人、つまり回心や転向を理解しうる人としえない人にと人間は二分されるといった裁断は、²⁷⁾「恥じ」よりも「呆れ」に同調している。羞恥は自責と相即不離であり、密かな決意へと転移する可能性があるが、自嘲は諦念に沈んだり、傍観へ回帰しやすい。このように恥と呆れとでは意識のベクトルは同じではなく、そのため「恥じた。呆れた」といってもいい」という自己意識がその後の内田をどのような方向に導いたのか、その読みとりを難しくしている。²⁸⁾——私はいまこのように書いたが、恥じ、呆れたという傍観の悔恨がその後の内田をどこに導いたのか、という私の問いには問題がある。それは「恥じた。呆れた」といってもいい」という語りをそのまま事実として前提にしているからである。そのように読むとフィクションの陥穽にはまる。「作者の回想や自作解説を、あまりにそのままに受け取りすぎる論者が多すぎる。作家〔作者〕が真摯に語れば語るほど、それを真に受けてはいけな

27) 人間を究極的に黒か白かに区分けする二項対立的な人間観は他のエッセイにもみらるが（「木下戯曲をふり返る——『白い夜の宴』台本を手にして——」『著作集』第 6 巻、118 ページ）、早くには戦後すぐの講演「民主主義文化確立のために」でも語られている（拙稿「内田義彦と『青年文化会議』の啓蒙活動」『大阪経大論集』第 61 巻第 1 号、2010 年 5 月、第 IV 節参照）。この二分法的な人間把握はレトリックであって内田の人間観を表すものではないともいえるが、それにしても二分法的に人間を描こうとする志向は内田の一つの特徴である。

28) 内田は 1947 年から 49 年にかけて民科のほか、共同研究（「日本ファシズムの抵抗線」研究および『潮流講座 経済学全集』編集）、サークル活動（東大音感合唱研究会、『資本論』輪読会）、啓蒙活動（『未来』同人、第二次青年文化会議）をおこなっている。最後の第二次青年文化会議については、拙稿「『青年文化会議』の設立と内田義彦」『経済学論究』第 63 巻第 3 号、2009 年 12 月、728-733 ページ参照。

い」という戒めを、²⁹⁾ 内田を読むばあいにも心してよい。ましてや内田はフィクションを意識的に構成すると言っているのだが。恥じた、呆れたという語り口に、むしろ上に述べた羞恥と自嘲とへの意識の分裂・未決定を読み取るにとどめたい。

VI 再び「チェコ事件」をめぐる

内田が1973年ごろになぜ傍観について語ろうとしたのだろうか。その答えは1971年の「憂と献身」にある。さきにその一部をテキスト4に引用したが、ここでは別の箇所を**テキスト7**として引用する。内田は1969年にチェコ・フィルの来日演奏会を聴きに出かけた。それはチェコ事件の勃発からおよそ1年後のことである。その演奏会の開演にあたって君が代とチェコ国歌が続けて演奏されたことに内田は衝撃を受ける。あらためて演奏会のパンフレットを覗くと、チェコ・フィルの演奏会が昨年までは社会主義圏の諸国で開かれていたのに、今年の予定として日本とアメリカのみが記されていることに気がつく。そして指揮者も、チェコから亡命したアンチェルではなく、東独から急遽故国へ戻ったノイマンであることにも思いが及ぶ。こうした事実を目のあたりにして内田は「身のすくむ思い」がし、「チェコの人間に立ち会わされた感じ」をいただいた。言い換えれば「『傍観者』^{ママ}である自分を始めて思い知らされた」というのである。

(テキスト7)

鷗外ともう一度遭遇することになったのは、チェコの哲学者コシークの『具体性の弁証法』の邦訳〔1969年9月出版〕を読んだ時である。この本を読みながら鷗外訳の「ファウスト」を思い出した、……この本の中心テーマの一つは……ゾルゲであるが、そのゾルゲに〔『具体性の弁証法』で〕関心というまい訳語があてられている。(中略)

この本を読みながら私の念頭を去来したのはチェコ事件のまさしく進行

29) 神谷光信『須賀敦子と9人のレリギオ——カトリシズムと昭和の精神史——』（修訂第2刷）日外アソシエーツ、2008年、122ページ。

中に訪日したチェコ・フィルの演奏会〔1969年6月〕当日のことであった。当日の演奏会は君が代で始まった。それが「君が代」であると感じたのは、かなり時間がたった後である。それにつづくチェコ国歌の朗々たる演奏が終わったとき、呆然として私はパンフを見た。パンフには演奏記録が書いてあって、それには、昨年までずらりと並んだ社会主義圏の国名のあとに本年の演奏予定地として、日本、アメリカとある。「『わが祖国』よりモルダウ他」という演奏会の予告でひそかに若しかしてあの「タボール」をと期待していた私は、身のすくむ思いがした。そういえば指揮者は海外に亡命したアンチェルではなく、チェコ事件後、東独から急遽チェコに戻ったノイマンである。私はチェコの人間に立ち会わされた感じを、逆にいえば「傍観者」である自分を始めて思い知らされた。

コシークの本の殆んど冒頭にゾルゲの語を見出し、私はだから、殆んど同時に「ファウスト」の「夜」の有名な……せりふで、鷗外がゾルゲを「憂」と訳していたことを思い出したのである。
（「憂と献身」『図書』1971年11月号、5-6ページ。）

1973年の「僧正と三人の隠者の話」でかつての「安易な民主主義的解放感」の時代の自分の傍観者ぶりを恥じ、呆れた、と記したことは、その2年前に「憂と献身」でチェコ事件に対して同じく傍観者であったと書いたことと呼応している。正確に言えば、内田は、チェコ事件へのみずからの傍観が1948年から49年ごろの時代状況への傍観とひとつながりのものであることを確認したのである。1981年になって、テキスト3に「プラハではいまだ大変なことが起こっておりますけれども」という一節を唐突に付け加えたのも、このことと関係している。内田は1980年代になっても、チェコ事件のことを、それゆえまたそれと関連する、民主主義的解放感、民主化政策、近衛新体制のそれぞれの時代の自分の選択を再考し続けていたのである。

ところで**テキスト7**の主旨は誤解のしようのないものであるが、その記述には不自然なところがある。そもそもチェコ・フィルの演奏会で自分が傍観者であることを初めて思い知らされた、というのは釈然としない。テキスト3のい

うように、少なくとも1968年の10月時点でチェコ事件に重大な関心を払っていたとすれば、その前後に講演やエッセイ等で何らかの意思表示や行動をしなければ、少なくとも外からは傍観者とみなされたであろう。内田であればそれはわかるはずのことである。それをチェコ・フィルの演奏会という場で初めて自分の傍観ぶりに気づかされたというのは、レトリックとしてどうだろうか。さらにチェコ人の著者の『具体性の弁証法』を読みながら鷗外訳の『ファウスト』を思い出し、そして同時にチェコ・フィルの演奏会当日の自分の体験を思い出したという手の込んだ組み立ても、作為に傾きすぎていないだろうか。また細かいことだが、演奏されている曲が君が代であることを「かなり時間がたった後」で気がついたというのは、チェコ国歌の「朗々たる」演奏ぶりを際立たせるためのレトリックだとしても、君が代を聞き慣れた日本人であれば不自然な感が免れない。指揮者は演奏会の眼目の一つであるから、アンチエルではなくノイマンが指揮棒を振る意味は、音楽通である内田であってみれば、演奏会に行く前からわかっていたのではないだろうか。嘘があるというのではない。かりに失念や記憶違いがあったにしても、また多少の誇張があったとしても、問題はもろもろの材料に使うフィクションを作りあげるさいの練りあげが足りず、そのため筋立てや一つ一つの事柄の語りに不自然なものが残るのである。言い換えれば、事実のフィクションへの加工が真実に昇華しきれていないのである。

すでに述べたように、「憂と献身」は発表の3年後に加筆される。細かい修正を別にして、**テキスト7**の第2段落と第3段落のあいだに次の文が付加された。

チェコ事件が起ると、すぐさま『わが祖国』の全曲を、しかも何とノイマンとライブチヒ・ゲヴァントハウスの組合せで発売したレコード会社の商魂に私は義憤を感じたが、その怒りの何と底の浅かったことか。私は「傍観者」であるところの自分を初めて思い知らされた。傍観者にはゾルゲ〔憂〕はない。レコード会社の無神経との差いくばく。

（「憂と献身」『学問への散策』1974年、201-203ページ、『著作集』第6巻、167

ページ。)

「傍観者にゾルゲはない」という重い断定と自分もまたその傍観者であるという思いとを語るために、チェコ事件直後、レコード会社の商魂に「義憤」を覚えた体験と、それが底の浅い義憤であったというのちの反省とがもう一つ素材として付け加えられたのである。この加筆でエッセイにフィクションとしてのふくらみと説得力とが増したかどうかは、読者によって判断が分かれるかもしれない。

VII 結び

言うまでもないことだが、いったん著者の手を離れたものは、読者にどのように読まれようと著者の容喙の外にある。ところが内田は自著の「あとがき」で読者にいろいろと要望する。たとえば『日本資本主義の思想像』では「読者は、関心にしたがって、適当な所から適当に読んで下さって結構であるけれども、出来れば全体を通読していただきたい。」といい、また『学問への散策』では、「好きなどころから始めて全体を二度通読して下さる読者にめぐりあえることを、それにたえる本であることを、切に願う」という。『社会認識の歩み』では、読者が二度の通読してくれることを前提に、「この本で私は、あぶり出し方式の伏線を意識的にはりめぐらした。伏線の内容を意識しなくても読めるし、意識しても読める。……その意図が多少とも成功して、最初の通読と、再読とに、それぞれ別個の興味を読者に喚起しえたとすれば、望外の幸せである。」といい、『著作集』では、『『経済学の生誕』の読者がエッセイを、またエッセイや新書の読者が『生誕』を合わせて読んでくれればというのが、私の秘やかな願いである。それは私にとっても、私が考え、生きてきた跡を振り返って、明確にする仕事でもある」(第1巻「後記」という。自著の通読から二度の通読へ、さらに読み方を替えての二度の通読へ、最後は内田の研究書とエッセイ等との併読によってかれの生涯の仕事の「玩味と評価」へと、次第に要求水準は高くなる。とりわけて研究者に対しては、「小林〔昇〕君の全業績〔『小林昇経済学史著作集』全11巻、未来社、1976-79, 88-89〕をさぐり、そ

こをくぐり抜けながら私のものを読んで下さることを希望したい」と語りかけている。³⁰⁾「くぐり抜けながら」という表現に内田の自意識が垣間みえるが、こうした読者に対する要求や期待もまた自己言及（自己語り）のひとつの形である。他方で、かゆいところまで配慮を行き届かせるこのような読書の手引きは、読者の読みを誘導し管理することにもなりかねないのだが——読者はそれを親切とか用意周到とかと錯覚する——、それはともかくとして読者には、内田の指^{レファレンス}示に背いても、自由に読む権利があることはいうまでもない。また「あぶり出し方式の伏線」が張り巡らされているとしても、それを理解して読むことが正しい読みとはいえず、誤解をおそれずにいえば、著者（内田）の意図や仕掛けからずれた「誤読」にこそ創造的な読みの可能性が開かれるともいえる。

とはいえ内田の手引きで無視しえないのは、かれ自身が種明かしをしたように、その作品がフィクションとして構成されていることである。その構成にあたっては——内田はあえていわないが——レトリックが意識的に配置されている。そこにかれのエッセイを始めとする作品群を読むおもしろさと同時にその難しさや分かりにくさの原因がある。したがって読者にはかれの研究書を読むのとは違った意味での、テキストへの細心の注意と目配りのきいた読解とが求められる——これが本稿の趣旨である。

内田のいうフィクションにかんしては、かれが木下順二の作^{ドラマトルギー}劇法を資料主義と解説していることが参考になる。

現実におこった歴史上の事件を、そのまま素材として使うのをかりに素材主義というすれば、資料主義という……のは、事件が生み出した個々の資料をそのまま作品に使うことである。歴史上の事実としての事件は、さまざまな資料を生み出し後世に残すであろう。……その一つ一つの資料の中に、事件全体の、また、事件の中に生き、あるいは事件を眺めた人間の観察と思索と行動の諸断片が、なんらかの形で秘められている。そうい

30) 内田義彦「抜群の凝集力と迫力と」『小林昇経済学史著作集』「内容見本」、1975年12月。『著作集』第6巻、452ページ。

う、個々の、時代を解釈する資料としては疑わしいけれどもそれだけにさまざまな人間の姿を生々しく反映する資料を、……生のままの資料として意識的に使う、それをぼくは資料主義と呼びたいのである。(中略)〔資料主義では〕ある特定の事件を取り扱いながら、その事件から、ある時、ある場所という要素をはぎとって、いつでもどこでも、小さく、あるいは大きい形で何度も起こったし現に起こっている事件として、意識的に構成されている……。 (傍点内田)³¹⁾

内田のいう資料主義とは、ある事件が生み落としたさまざまな資料を生の形で、しかし意識的に使いこなしながら、その事件の局所性・一回性を超えた普遍性を意識的に再構成することで、演劇空間のなかにかえって“いま、ここで”のリアリティを構築するということであろう。そうであれば、内田のフィクション作りの技法と異ならない。ここでも木下の作劇法によりながら、内田は自己言及をおこなっている。したがって内田のいう資料主義を木下自身が自分のドラマトウルギーであると認めるかどうかはわからない。

以下では内田作品のフィクションとしての性格から派生する問題点を箇条書き風に列挙して結びとする。

(1) フィクションにおける「作者」と「語り手」との分離の問題

いま『作品としての社会科学』所収の「社会科学の視座」を例にとって作品の外形をみると次のようになる。

作者	内田義彦
刊行年	1981 年
舞台	1968 年に京都で催された文化講演会
語り手	講演者の私

このエッセイは作者の内田と講演者の私とが同一人物のかたちをとっているが、二人は別人である。いうまでもなく 1968 年に開催されたもとの講演会では、作者と講演者の分離ということは生じていない。内田はこの講演を素材

31) 前掲、内田「木下戯曲をふりかえる」『著作集』第 6 巻、119-120 ページ。

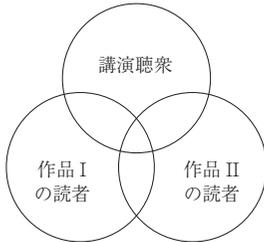
にして、講演会の演題と同名のエッセイに仕立て直し、「作者＝読者」の関係に「語り手＝聴衆」を組み込んだ「虚」の作品空間（フィクション）を制作し、そうすることで物語りとしてのエッセイに作者・内田のアクチュアリティを生み出すとともに、語られることの思想的リアリティを創造しようとしたのである。こうした作品における作者と語り手との分離は、作品を介した作者の思想にかんする多様な解釈の可能性を生む原因ともなるし、また読者によるその虚空間の拡張をも許すことになる。たとえば、チェコ事件のコンテキストに、内田が言及しなかった1956年のハンガリー事件や目撃しえなかったソ連の崩壊といった出来事さえも、それと重ねて読解可能となる。いわば絵画（絵巻物）の異時同図の手法を読者も採用しうる。こうしてエッセイを通した内田の思想の読み取りと展開は、読者によるテキストの変容や解体をも含みながら立体的となる。私がさきに誤解を恐れつつ創造的「誤読」といったのは、このこととも関係している。

(2) 聴衆・読者の多層構成の問題

前記のことは作者側から発する問題だとすれば、今度は受け手側の問題である。同じく「社会科学の視座」を例にとると、受け手は大きく三つのグループに分けられる。第1は1968年の講演をじかに聴いた聴衆、第2は『思想』掲載のエッセイ（作品Ⅰとする）の読者、第3は『作品としての社会科学』所収のエッセイ（作品Ⅱとする）の読者である。最後の第3の読者に『著作集』の読者も含むものとする。それを図にしたのが図3である。三つのグループを円で表すと、右側に示したような7通りの組み合わせができる。講演の録音テープがカセットとして売り出されたから、その聴者をいれるとさらに多くの組み合わせができるが、煩雑になるだけなので論述の外におく。ちなみに私は、作品Ⅰと作品Ⅱの読者であり、講演を聴いていないものの1989年発売の講演テープの聴者でもある。

内田のもっとも熱心な受け手は第7のグループということになるだろうが、講演会にわざわざ足を運んで警咳に接しようとした聴衆（第1のグループ）もまた内田に強い関心をいだいていた人たちであろう。しかし問題なのは受け手のグ

図 3



- 1 講演のみを聴いた聴衆 (1968)
- 2 講演聴衆+作品 I の読者 (1968, 1969)
- 3 講演聴衆+作品 II の読者 (1968, 1981)
- 4 作品 I のみの読者 (1969)
- 5 作品 I の読者+作品 II の読者 (1969, 1981)
- 6 作品 II のみの読者 (1981)
- 7 講演聴衆+作品 I の読者+作品 II の読者 (1968, 1969, 1981)

ループ間で、内田の語りとその受け取り方に違いがあるということである。たとえば講演を直接聴いた者は、1968 年という時代状況のなかで、京都会館で内田とひとときを共有し、内田の語りに共鳴や反発を共時的におこないながら、目に見えない対話の体験をもったであろう。その人たちと、1981 年に発売された『作品としての社会科学』によって初めてこのエッセイを読んだ人（第 6 グループ）とでは、その語りの内容も違えば、受容の時代的コンテキストも違う。私のように、講演のカセットテープを 2010 年になって聴いた者と、1968 年に講演を直接聴いた者とでは、講演内容が同じであっても、臨場感の有無を含めて受け止め方にあきらかに違いがあるだろう。第 7 のグループの人たちでも、講演と作品 I および作品 II との違いに気がついたであろうか。このことは作者と読者あるいは聴者とのあいだの「発話=伝達=受容」の過程に多重の裂け目があることを示している。これはこうした裂け目を「意識的に」作る内田の作り手の問題でもあるし、またその裂け目のあることに気づかされない読者や聴者の問題でもある。そこに記録（記憶）とフィクションとの混同という危うさが生じる。³²⁾

32) たとえば、「学問と芸術——フォルシュングとしての学問——」（『思想』No.579、1972 年 9 月。『学問への散策』および『著作集』第 6 巻所収）の末尾の「付記」に、「これは、本年 5 月北海道大学図書刊行会主催の講演会のテープ録音をもとにして書き下ろしたものである。」と記されている。「書き下ろした」という表現から、このエッセイはもとの講演内容とかなり異なるものであることが推測される。このばあい講演の聴衆とエッセイの読者とのあいだには、テキスト受容において大きな裂け目がある。

「社会科学の視座」のばあいには、同名の講演がエッセイ（フィクション）に繰り返し作り直された例であるが、内田はいくつかの講演をもとにして一つのエッセイ（フィクション）を作り上げることもしている。たとえば『読書と社会科学』（1985）に収められた「III 創造現場の社会科学」について、「III は、専修大学で学生にした講義（1982年、5-6月）のために作った原稿をもとにしているが、その後あちこちで、院生や一般市民を相手にした講演やその質疑をも織りこんで作製した。だから、講演の形をとってはいるものの、まったくのフィクションである。」（傍点竹本）³³⁾ といい、また『著作集』第9巻のために「書き下ろされた」おそらく内田の最後のエッセイ「学問のよもやまばなし」は、福島大学や日本大学で行われた講演の記録をもとに、「いまこうしてそれを文章化するに当たって、それぞれの講演会でそれぞれ焦点を異にしてお話ししたことを一つにまとめ、フィクションとしての講演の性格を加えました。」（傍点竹本）³⁴⁾ という。こうなると最初の講義や講演とエッセイとはまったく違って良いほど別物となり、聴講者や聴衆がみずからの記録（記憶）とのちに作成されたフィクションとを混同するおそれは少ないだろう。しかしこうしたフィクション作りは講義や講演を手段化し、無化することになりかねない。別々の講義や講演を聴いた者の記憶を抹消し、その講義や講演のコンテキスト（から講師）を消去することで、結局は語る=聴き取るというコミュニケーションの時空間を自己消滅させるからである。

もっと複雑な制作過程がとられたもう一つの例を挙げよう。『資本論の世界』（1966）の「あとがき」で次のようにいわれている。「この本は講演の形をとっている。それは、もともと昨年7月、N・H・Kで10回にわたって放送した録音テープが土台になっているからである。が、しかし、本書は録音速記に加筆したものではない。テープをききながら、こうもしゃべればよかつたかなという形で、全く新たに書き下ろした。」³⁵⁾ その書き下しまでに、「まず第1草稿

33) 内田義彦『読書と社会科学』岩波新書、1985年、213ページ。『著作集』第9巻、1989年、160ページ。

34) 内田義彦『著作集』第9巻、170-171ページおよび281ページ。

35) 前掲『資本論の世界』213ページ。『著作集』第4巻、1988年、403-404ページ。

ができあがったところでそれをもとにおしゃべりをしてテープをとる。そしてそのテープをききながら、ノートを取り、そのノートをもとにして、こうしゃべればよかったかなという形で原稿をつくる、そしてそのまた原稿をもとにしてテープ録音をし、それをききながら第 3 次原稿をつくる」というプロセスを辿ったという。³⁶⁾

そのあとに気にかかることが書かれている。「こうした作業は、原稿を書きあぐねたとき親切な友人がそばにいて聞いてくれると、……書くべき内容が自分で明らかになってくる……。この場合、友人が何かひとこといつてくれる忠告もさることながら、熱心にきいてくれるということそれ自体が肝要なのである。とすればテープほど忠実な聴者はあるまい。ということからテープを使い出した……。」（傍点内田）³⁷⁾ つまり『資本論の世界』のばあいには、元の NHK の放送のリスナーの他に、本作りの過程で内田の話を熱心に聞いたり、討論の相手になったりした「親切な友人」つまり第 2 の聞き手が存在するのである。後者はたんなる聞き手ではなく、内田の書齋での応答者であり本作りの協力者（参加者）でもある。言い換えればできあがった『資本論の世界』は、一種の「工房」作品なのである。³⁸⁾ ところが制作過程で内田の話を熱心に聞き、討論相手になってくれた友人たちよりも、ひと言も聞きもらさずに録音してくれるテープレコーダーがいつそう「忠実な聴者」だという。こうして『資本論の世界』では、内田が最初に放送で呼びかけ、語りかけた第 1 の聞き手は消え、第 2 の聞き手も、応答よりも黙って「熱心にきいてくれる」ことに存在意義が見いだされ、したがって最終的には完璧な記憶者（記録者）であるテープレコーダーに全幅の信頼がおかれ、実質的な聞き手は無機質な機械となり、人間の聴き取るという行為と能力とに信がおかれなくなる。³⁹⁾

36) 内田義彦「苦労ばなし」『図書』1977 年 5 月、5 ページ。『著作集』第 6 巻、401 ページ。

37) 同上「苦労ばなし」5-6 ページ。『著作集』第 6 巻、401 ページ。

38) 内田が早くから（1950 年ごろ）制作を工房的におこなっていたことは、その現場にいた二人の証言がある。その頃はテープレコーダーを活用していなかったようである。（田添京二『「生誕」のころ』『著作集』「月報 1」1988 年 5 月、6 ページおよび吉澤芳樹「ありじごく」同「月報 7」1989 年 5 月、5 ページ参照。）念のためにいえば、工房的な制作法をとったからといって、『資本論の世界』等が内田の作ではないということではない。

39) 前掲、内田「苦労ばなし」6 ページ。『著作集』第 6 巻、401 ページ。

(3) 作品のテーマと方法との問題

本稿でとりあげた「社会科学の視座」、「憂と献身」、「三人の隠者の話」をつらぬくテーマは「傍観」の問題である。「社会科学の視座」は傍観の裏返しである参加（賭け）がテーマとなっているから、共通のテーマは正確には参加／傍観である。これが敗戦後の「民主主義的解放感」の時代状況と1968年のチェコ事件とにかかわらせてフィクションとして叙述される。そのさい鷗外『最後の一句』、トルストイ『三人の隠者』、コシーク『具体的弁証法』、鷗外訳『ファウスト』などの書物、さらには演奏会や観劇などがレトリックの材料（内田の表現では資料）として駆使される。このレトリックの多用は、テーマを鮮明に浮かび上がらせるうえで効果を発揮している。他方で、レトリックが巧みであればあるほど、そのレトリックの光彩が論理の緻密な展開の芽を摘み、テーマがレトリックに中途半端に埋没してしまうことにもなる。フィクションやレトリックはテーマを明確かつ奥行きのあるものにして、説得力を増すための方法であるが、その方法がエッセイの展開を複雑にし、かえってテーマを曖昧にすることもありうる。1971年の「憂と献身」にその傾向がみうけられる。

いま述べたように、このエッセイのテーマはチェコ事件を素材にして傍観の問題を論ずることにあるが、エッセイが公表される1年前、1970年11月25日に起こった三島由紀夫の事件というコンテクストをそこにおいて読むと、テーマはどのような光芒を放ち始めるだろうか。三島は市ヶ谷の自衛隊東部方面総監部を占拠し、そのバルコニーから憲法改正のためのクーデタに決起しよう自衛隊員に訴えたが、隊員たちはアジテーションに乗らず、三島は自裁に追い込まれた。（三島は始めから自作のシナリオ通りに演じたという説もあるが、その真偽の詮索はいまの問題ではない。）このエッセイには三島の名が一度もあらわれないが、「憂と献身」という題名は意味深長である。戦後期と近くは1968年のチェコ事件にたいする内田自身がかかえた「傍観」の問題は、あるいは近衛新体制と民主化政策への内田なりの「参加」の問題は、三島事件によってあらためて内田の前に立ち現れたのではなからうか。内田にとって傍観とは現実を「鑑賞的にみる態度」のことであったが、三島事件によって非鑑賞的な傍観すなわち現実にコミットするひとつの姿勢としての傍観が、あるい

は内田の表現に倣えば、傍観者にもゾルゲ（憂）はあるということが初めて見出されたのかもしれない。⁴⁰⁾ この推定が許されるとすると、参加であれ傍観であれ、人は何に根拠をおいてそれを選び取るのかという選択の規準ないし根拠問題が内田に意識されてきたはずであるが、それは表に出されていない。このエッセイに含まれる傍観を恥じた、呆れたという表現に内田の意識の分裂・未決定をみると第 V 節の末尾に書いたが、それは参加／傍観の選択とそれにたいする複眼的評価とが宙づり状態にあることと関係している。

このように読むと「憂と献身」のレトリックにみちた錯綜した叙述も納得できる。それは三島の名を出さずに内田にとっての三島事件の意味を語ろうとすることから生まれる晦渋さであり、思想的問題としては参加する、賭けることにひたすら正の前進的根拠を求める地点から、参加と傍観とをいわば等価としてその選択の根拠問題という難所へ踏み出したことからくる晦渋さともいえる。

これは私のひとつの読みであるが、テキストを読むことは、時空を隔てたテキストとの「対話」だとすれば、テキストに陳べられていることに対してだけでなく、テキストの空白に対しても問いを発することで初めてテキストはいま

40) 内田は「傍観者のものの見方」と「クリエイティヴなものの見方」とを対置して、「傍観者として鑑賞的にものを見るならば、現実をそのまま見ればよい。しかしクリエイティヴに物を見ようとするなら現実をそのまま見ただけで何にもならない。抽象し、再構成してはじめて実践的・創造的に物を見ることができる。」（『学問創造と教育』『教育』第 22 巻第 6 号、1972 年 6 月、20 ページ。『著作集』第 6 巻、96 ページ）といているから、傍観とは現実を目に映るままに鑑賞的にみる態度のことである。しかしこの頃に内田が傍観の諸相に目を向けるようになったとすれば、たとえば鷗外や甲南高校以来の友人である高安国世における傍観にも、あらためて思いが及んだであろう。

鷗外は明治 23 年（1890）にみづから創刊した『衛生療病誌』に「傍観機関」と称する欄を設け、旧弊な——内田のよく使った表現に倣えば、コネが幅をきかせる——医学界と「反動的な」ボスとに執拗な戦いを挑んだ。鷗外が「傍観機関」という名称を「殊更に『パラドクス』にしたがり」としているように、この語に込められた戦闘的傍観という逆説的意味合いは、鷗外をよく読んでいた内田にとっては先刻承知のことであつたであろう。（『鷗外全集』第 30 巻、岩波書店、1974 年、459-592 ページ。）

高安は「傍観者」と銘うった一連の歌作の冒頭に「わが過去も常にさびしく願ひ来ただ一つみづからの言葉をもつこと」という歌をすえた。高安にとっての傍観は、「みづからの言葉をもつ」という一事にかけて戦中・戦後を生き抜きこうとする単独者の厳しい姿勢あつた。（高安国世『年輪』白玉書房、1952 年。『高安国世短歌作品集』白玉書房、1977 年、167 ページ。）鷗外と高安では傍観の意味合いは違うとはいえ、ともに現実を鑑賞的にみる態度ではない。

の読者（私）にさまざまな相貌をみせ始める。⁴¹⁾ 内田も別の角度から私の言と重なることを言っている。「事実の——ある、部分的でしかも屈曲した——反映である資料〔テキスト〕のなかに事実を読み取ってゆくには、想像力の助けを絶対に必要とします。」（傍点竹本）⁴²⁾

最後に付言を一つ。内田は社会科学のフィールドで自己言及としてのフィクションという方法を創案した。「作品としての社会科学」という命題はそのことと関連している。そこからフィクションとしての自己つまり混淆され構築される自己（分裂する不透明なわたし、作られかつ演ずるわたし、自立も成熟もままならないわたし、等々）という認識が切り拓かれる可能性があった。その兆候はいくつかある。内田は「自分に納得がいくということは、自分のやっていることの意味が他人にも納得してもらえて初めて自分にも納得できるというものだと思うんです。」といい、⁴³⁾ また「書くということは、考えた結果を他人に知らせるという以前に、自己との対話というしんどい仕事を自分に課すことである。書いてゆくうちにどれだけ『自分』が失われてゆくか。いいたいことは無残にもペンから逃げてゆく。否、そもそも一体自分は、何を言いたいのかさ次第に心もとなくなつてゆく。」⁴⁴⁾ ともいう。前者では、他人の承認によって初めて自己承認がなされるという関係を言い当て、後者では自分の言いたいことがつまりは自分という存在が、書けば書くほど次第に融解してゆく体験を語っている。また学生時代の野間宏との論争について同様なことを吐露している。「一を聞いて十を語る能力を持つ私にとって、野間君を論破する

41) 前田愛は「注釈というのは……〔時の侵食によって〕虫食いだらけになったそのテキストの空白部分を補うことによって、もう一度テキストを同時代のコンテキストのなかに置きなおすそういう目的をもっている」といっているが、これは社会科学のテキストの読みにも適用されるだろう。（前田愛『増補 文学テキスト入門』ちくま学芸文庫、1993年、123ページ。）

42) 前掲、内田「学問と芸術——フォルシュングとしての学問——」『思想』23ページ。『学問への散策』373ページ、『著作集』第6巻、306ページ。

43) 内田義彦「対談のすすめ——内田義彦氏に聞く——」『国語通信』222号、1979年12月、9-10ページ。『著作集』第6巻、390ページ。

44) 内田義彦「『経済と法』の刊行を祝って」『経済と法』（専修大学大学院紀要）創刊号、1969年9月。『著作集』第6巻、457ページ。

ことは容易であつた。困難は後に、彼と別れ、孤独な夜になって現れた。『そうかなあ』という声音とともに、論争の中では聞き飛ばしていた……一語一語が、重い言葉となつて聞こえてくる。すると忽ち自分の言葉と身体が自方を失つて宙に浮いてゆく、そのくやしきはこたえた。いまでもそうである。」(傍点竹本)⁴⁵⁾ これもレトリックの効いた真摯な文章であるが、この自己言及のパラドックス(自己言及による私の無根拠性への逢着)の方向に省察を進めると、フィクションは作品の方法の域を越えて、「本当の／本来の／純な／真の」といったたぐいの冠辞のつく人間観や社会観——たとえば真の人間、純な人間(純な人種)、真の学問と文化、純粹な資本主義、本当の社会主義、歴史を貫通する市民社会(時代を超越する普遍的な市民社会)、その裏返しとしてのただの生、特殊な日本など——にたいして複眼的な構えから思考を深める端緒となつたかもしれない。

一方、経済学史研究においても、フィクションとしての自己に近い認識が内田の代表作である『経済学の生誕』(1953)の「あとがき」に表明されている。

専門の学問として経済学をやつてゆくうちに、ぼくはほだいにいらだたしきを感じはじめた。ぼくが経済学の世界にはいつているとき、ぼくの眼に人間はきえ、そして、ぼくが人間と接触しているとき、ぼくは自分が経済学者ではなくなっているということに気づいたのである。しかも、ぼくは『資本論』を勉強していたのであるが、それは、ぼくの人間をみる眼には

45) 内田義彦「一語・一語の巨塔」『現代日本文学大系 第 81 巻 野間宏・武田泰淳集』「月報 68」、筑摩書房、1972 年 6 月、1-2 ページ。『著作集』第 6 巻、203 ページ。

内田のこの回顧に照応する野間の証言がある。「〔下村海南の〕別邸では、フランス、イタリアの人民戦線の考え方というものが流れていて、地図で人民戦線の人たちはどこまで進んだとか、そういうのを覗き込んで話し合うというような、そしてそういう空気のかなかで進める議論の最後のところで、内田義彦が判断の決定を出すわけですけれども、私は、そうかなあと言って、どうも納得できないという感じで帰っていきました。」「私はその下村正夫〔海南の息子〕の邸宅で、そうかなあ、といひまして、彼に『老子』というあだ名をつけていたのですけれども、老子というのは、……ちょっと早くお年を取り過ぎているぞというような意味なのです。それでそんなに結論を皆の前に出して自分がリーダーとしていられるんじゃないかという、そういうふうなことに對する疑問でもあつたのです。」(野間宏「わが内田義彦」『内田義彦著作集』第 10 巻別冊「私の中の内田義彦」岩波書店、1989 年、24-25、29 ページ。)

すこしもなっていなかった。……ぼくは、友人の社会学者、歴史学者、法学者あるいは文学者と接しているとき、かれらが出している問題の解決に指針を与えるどころか、それを経済学のことばにほんやくすることすら、まったくできなかつたのである。

内田は人間と専門家とへの自己の分裂、あるいは専門家としての人間的な未成熟にたいするいらだたしさに促されて、『国富論』との「全人間的な」読みの格闘を通して内田『国富論』を生み出そうとした。⁴⁶⁾ その意味で『生誕』は経

46) 内田はテキストの著者との「全人間的」なとりくみ(格闘)について繰り返し語っている。「大きな学説の創造者は、全人間的な眼をもって先人の業績に接し、そのあるものを古典にすえて学説を創った。ですから、われわれ後人が、それらの巨人に対して学史的な研究をする場合にも、……全人間的な眼で学問を創造した人の学問創造の全課程と全人間的にとりくむことが要求されるわけです。」(傍点内田。前掲「学問と芸術——フォルシュングとしての学問——」『学問への散策』345 ページ、『著作集』第 6 巻、282 ページ。なお引用部分は最初の『思想』掲載文ではなく、『学問への散策』に収録するさいに加筆された。)「スミスはどういう考えでああ言ったんだらうかと考えてゆく場合、生起する事件群のなかで生きかつ考えたであろうスミスその人と全人間的にぶつかるわけです。」(前掲「学問創造と教育」『教育』1972 年 6 月。『学問への散策』112 ページ、『著作集』第 6 巻、92 ページ。この引用文は初出の『教育』ではなく、『学問への散策』に収録するさいに加筆されたもの。)「われわれがいまを生き、いまを切り開こうとしていると同様、スミスも(その時代の)いまを生き、いまを切り開こうと努力していたわけでしょう。同じいまを切り開こうとする立場に立って、過去の人間たるスミスと共生をし、ともに考える。……こう考えることによってスミスという過去の思想家の経験がいまに生きてくると私は考え、いろいろ考えて研究を進めてきました。スミスだけでなく、思想家一般について、共生・共闘する努力を通じて過去のさまざまな経験がいまに生きてくだろう。」(傍点内田。前掲「読書について」『桜門春秋』26 号、75-76 ページ。『生きること、学ぶこと〔新版〕』62 ページ。)

このように読者は、古典の著者の時代との苦闘をいわば追体験(共生・共闘)し、その著者の生を通してテキストを味読すること、いいかえればテキストや著者と適度の距離とることよりも、それに密着することが求められる。このような読み方は心酔や回心を呼び覚ますかもしれないが、「読む」という行為の足場であるモノ(テキスト)とヒトとのあいだの対等な交換関係(相互批判)が生成しがたいのではないだろうか。またこれは「全人間的な眼で学問を創造した」とみなされる『国富論』や『資本論』のようなテキストにのみ求められる読み方なのか、それとも古今東西のテキストにも一様に求められる読み方なのだろうか。「全人間的」「全人間的な眼」というレトリックで表されるテキストの質の判別基準は明確ではないが、それを別にしてもこの読み方ではテキストとその著者の人生とは一体の関係にあるものとみなされ、テキストを読むとは畢竟その著者を読むことだとみなされる。だが少なくとも内田に堪しては、エッセイにフィクションという方法を意識的に採用したとすれば、テキストと著者とを区別し、そのテキストに書かれていること、書かれていないこと(隠れていること)と読者との対話を、そしてそこから

経済学史の領域で「作品としての社会科学」を生み出す果敢な挑戦ともいえる。『生誕』のとりわけその「前編」の叙述は新鮮さをもって迎えられ、広い読者を獲得した。『生誕』に対する度重なる自己言及は（『著作集』補巻の索引によれば 70 回ほどだが、著作集未収録の文献を考慮に入れば、実際にはそれ以上）、その自信がなせるわざであろう。しかしそのことは他面で、『生誕』の出版直後に有力な学問的批判が出たにもかかわらず、⁴⁷⁾ それを十分に活かすことができず、かえってその学問的な継承と展開とを細いものにしたのではないだろうか。あるいは、社会科学において「文学的精神」と「論理的精神」とを架橋し、一つの社会科学「作品」に結晶させようとする「作品としての社会科学」の理念は、⁴⁸⁾ 内田をもってしてもなお方法としても実作においても実験途

読者に萌してくるものに期待すべきであろう。

さらに、上のような全人間的な読書論は、学問や社会の進歩の方向に自らの決断において主体的に関与し、それに賭け、そしてその結果に責任を引き受けることに生の実存的価値を認める内田の人生観ともつながっている。次の文にそれが良くあらわれている。「社会科学的認識の芽がわれわれの中で育ってくる最初の結節点は、われわれ一人一人が決断という行為に迫られることです。決断、賭けということがあって、はじめて事物を意識的かつ正確に認識するということが、自分の問題となってきます。……参加〔決断、賭け〕というのは、未来に起こるであろうことに対して責任を負うことです。（中略）ダンテが……自分において自分の行動を決めることを、人間の最低の条件として指ししました。『自分を賭ける』という行為を一生のなかで一度もしたことのない人間を、彼は、地獄にも入れない人間として人間の外に放逐してしまったのであります。」（内田義彦『社会認識の歩み』岩波新書、1971 年、44、46-48 ページ）

47) 小林昇「〔書評〕内田義彦著『経済学の生誕』(1953 年)』『経済評論』1954 年 1 月号。『小林昇経済学史著作集』第 IX 巻、未来社、1979 年収録。

48) 前掲、内田「アダム・スミス——人文学と経済学——」『思想』13 ページ。『作品としての社会科学』113-114 ページ、『著作集』第 8 巻、94-96 ページ。

「文学的精神」というのは狭義の文学の精神のことではない。内田は、社会科学の「端緒」に、あるいは社会科学を「貫通」するものとして、「底辺としての文学」と呼ぶべきものがあるという。それは政治や経済の思想の変化の前に、「価値観の変化」が「美意識」の変化という形で現れ、それを発端として文学に、さらには哲学や社会諸科学の体系にもその変化が現れる。その諸学の「母胎」をなすものが「底辺としての文学」——文学という言葉づかいが誤解を生みやすいが——つまり「文学的精神」である。したがってその初発にあるものは価値観であり、その変化を生み出す起動因は想像力である。（前掲「アダム・スミス——人文学と経済学——」『作品としての社会科学』72-73 ページ、『著作集』第 8 巻、60-61 ページ。この箇所は最初の『思想』掲載のものではなく、『作品としての社会科学』で加筆された。）なお、このエッセイよりも以前に内田は、「芸術は、就中、価値観の転換という一点に於いて、学問に方向づけをあたえました」といつていた（前掲「学問と芸術——フォルシュングとしての学問——」『思想』25 ペー

上のものであり、後進にとっては容易に継承しがたいものであった。いいかえれば「進歩」や「真理」といった価値（かっこ付のものではあるが）から一線を画したところに屹立する芸術「作品」と相似のものが、社会科学（学問）においても「作品」として存在可能なかどうかという根本的問題が未決のままに後進に残されたのである。

〔付記〕

「社会科学の視座」のカセットテープを聴く機会を与えてくださった同志社大学の西岡幹雄教授と関西学院大学の松本有一教授、および雑誌『未来』のコピーを頂戴した関西大学の中澤信彦教授にお礼を申し上げる。

ジ、『学問への散策』377 ページ、『著作集』第 6 巻、309 ページ。)

これとよく似たことを他の論者も述べている。シュンペーターは「科学における最有力な業績は、まさに観察ないしは実験や筋道立った論理の彫琢から生まれるというよりは、ヴィジョンと呼んだらもっとも適切な、芸術的想像に類似したあるものから始まる」といい、また物理学者の南部陽一郎も「科学研究は科学というよりも芸術に近いものです。そのためには自由奔放に想像を駆使することが必要です。同時に科学は知識と技法の積み重ねの上に成立っています。この二つの要素は必ずしもお互いに調和するものではありませんが、真に創造的であるためには両方とも習熟している必要があります。日本の戦後教育はこの二つの相反する要求のうち一面を犠牲にしてもう一面を伸ばしてきたように見えます。」と述べている。(J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, Oxford University Press, 1954, pp.113-114. 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史』上、岩波書店、2005 年、201-202 ページ。/ヨウイチロウ・ナンブ「科学・二つの文化・戦後日本」テツオ・ナジタ・前田愛・神島二郎編『戦後日本の精神史——その再検討——』岩波書店、1988 年、岩波モダンクラシックス版、2001 年、215 ページ。)

だが、こうした学問論を超えて、社会科学の方法論となれば、内田の文学的精神と論理的精神との統一論はなお詰めるべき問題が残されている。その点への批判は、小林昇〔書評〕内田義彦著『作品としての社会科学』（1981 年）を読む』『社会科学年報』（専修大学社会科学研究所）第 16 号、1982 年 3 月、『小林昇経済学史著作集』第 XI 巻、未来社、1989 年収録、389-393 ページ、および小林の批判をヴェーバー研究の観点からさらに進めた内田芳明『ヴェーバー受容と文化のトポロギ』リプロボート、1990 年、149-163 ページを参照。内田は、「史眼」と「史観」、「文学」と「文学〔的〕精神」など、重要な概念をときに無差別に使用しており、詰めるべき点にはそうしたことも含まれている。